

4. PEANO の公理による N の基礎付け

本節では、自然数全体の集合 $N = \{0, 1, 2, \dots\}$ については、ここで公理で規定されるまで知らない、という立場で考えよ。

集合 N とその元 $0 \in N$ および写像 $s : N \rightarrow N$ の組 $(N, 0, s)$ が、次の公理系 (Peano の公理系) を満たすとする：

- (1) $\forall n \in N : s(n) \neq 0$
- (2) s : 単射 (即ち、 $\forall n, m \in N : s(n) = s(m) \implies n = m$)
- (3) 部分集合 $S \subset N$ に対して次が成り立つならば $S = N$:
 - (a) $0 \in S$
 - (b) $\forall k \in S : s(k) \in S$
 (これは数学的帰納法の原理を公理化したものに他ならない。)

以下、 N の元を自然数と呼ぶ。また、 $n' := s(n)$ と書き、 n' を n の後継・後続数・次などと呼ぶ。必要ならば、 $1 := 0', 2 := 1'$ 等々を書く。

問 4-1B. 0 以外の自然数は或る自然数の後継である。即ち

- $\forall n \in N : (n = 0 \text{ または } \exists m \in N : n = m')$

(ヒント：この条件を満たす自然数全体の成す集合を S として、 $S = N$ を示せ。)

問 4-2B. $n \in N$ に対し、次で (帰納的に) $S(n) \subset N$ を定義し、 n の切片と呼ぶ：

- $S(0) := \{0\}$
- $S(n') := S(n) \cup \{n'\}$

このとき、次が成り立つ：

- (1) $S(1) = \{0, 1\}, S(2) = \{0, 1, 2\}$ 等々
- (2) $\forall n \in N : S(n') = \{0\} \cup \{m' \mid m \in S(n)\}$
- (3) $\forall n \in N : n' \notin S(n)$

問 4-3C. 前問で定義した切片を用いて、 N 上の関係 \leq を次で定める：

- $a, b \in N$ に対し、 $a \leq b \iff a \in S(b)$

(また、便利のために関係 \geq を $a \geq b \iff b \leq a$ で、関係 $<$ を $a < b \iff (a \leq b \text{ かつ } a \neq b)$ で定めておく。関係 $>$ もしかるべく定めよ。)

- (1) このとき、次が成り立つ：
 - (a) $\forall a \in N : a \leq a$
 - (b) $\forall a, b \in N : a \leq b, b \leq a \implies a = b$
 - (c) $\forall a, b, c \in N : a \leq b, b \leq c \implies a \leq c$
- (2) $\forall a, b \in N : a \leq b \iff a' \leq b'$
- (3) $\forall a, b \in N : (a \leq b \text{ または } b \leq a)$

問 4-4B. N 上の加法 $+$ を、次で (帰納的に) 定義する：

- $n + 0 := n$
- $n + m' := (n + m)'$

このとき、次のようなしかるべき性質が成り立つことを示せ。

- (1) $\forall a, b, c \in N : (a + b) + c = a + (b + c)$
- (2) $\forall a \in N : 0 + a = a$
- (3) $\forall a, b \in N : a' + b = (a + b)'$
- (4) $\forall a, b \in N : a + b = b + a$
- (5) $\forall a, b, c \in N : a + c = b + c \implies a = b$

問 4-5C. N 上の乗法 \cdot を、次で (帰納的に) 定義する：

- $n \cdot 0 := 0$
- $n \cdot m' := n \cdot m + n$

このとき、次のようなしかるべき性質が成り立つことを示せ。

- (1) $\forall a, b, c \in N : (a \cdot b) \cdot c = a \cdot (b \cdot c)$
- (2) $\forall a \in N : 0 \cdot a = 0$
- (3) $\forall a \in N : 1 \cdot a = a$ (ここに $1 := 0'$)
- (4) $\forall a, b \in N : a \cdot b = b \cdot a$

- (5) $\forall a, b, c \in \mathbf{N} : (a + b) \cdot c = a \cdot c + b \cdot c$
 (6) $\forall a, b, c \in \mathbf{N} : a \cdot c = b \cdot c, c \neq 0 \implies a = b$

問 4-6C. \mathbf{N} 上の加法 $+$ と大小関係 \leq との間に、次が成り立つ：

- $n \leq m \iff \exists k \in \mathbf{N} : n + k = m$

(従って、先に加法 $+$ を定義して、これで大小関係 \leq を定義しても良かった。こちらを \leq の定義として、上で示した \leq の諸性質を証明してみよ。)

問 4-7D. \mathbf{N} 上の冪 n^m を、しかるべく帰納的に定義し、しかるべき性質を示せ。

5. ε - δ 論法

本節では、実数全体の集合 \mathbf{R} についての基本的な性質 (演算・大小関係など) については或る程度は素朴に知っているという上で、 \mathbf{R} における数列の収束について ε - N 流に定式化する、という立場で考えよ。(「 ε - δ 論法」とは、関数の収束の定式化において、習慣的に文字 ε, δ を用いることから来る呼び名であり、数列の収束の場合は、習慣的に文字 ε, N を用いるので、「 ε - N 論法」と呼ぶべきかもしれないが、両者を包括して「 ε - δ 論法」と呼ぶことが多いので、ここでは標題として「 ε - δ 論法」を用いた。尚、数列の収束・極限においては (関数の極限と違って)「 $n \rightarrow \infty$ で」に決まっているので、以下ではこれを省略する。)

実数列の収束について以下で定義する：実数列 $a = (a_n)_{n=0}^{\infty}$ について、

- $a_n \rightarrow \alpha \iff \forall \varepsilon > 0 : \exists N \in \mathbf{N} : \forall n \in \mathbf{N} : n \geq N \implies |a_n - \alpha| < \varepsilon$
(少し端折って、 $\forall \varepsilon > 0 : \exists N \in \mathbf{N} : \forall n \geq N : |a_n - \alpha| < \varepsilon$ と書くことも多い。)
- $a_n \rightarrow +\infty \iff \forall M \in \mathbf{R} : \exists N \in \mathbf{N} : \forall n \in \mathbf{N} : n \geq N \implies a_n > M$
- $a_n \rightarrow -\infty$ も同様 (しかるべく定式化せよ)

実数列 $a = (a_n)_{n=0}^{\infty}$ について、Cauchy 列 (基本列) ということ次で定義する：

- a が Cauchy 列 $\iff \forall \varepsilon > 0 : \exists N \in \mathbf{N} : \forall n, m \in \mathbf{N} : n, m \geq N \implies |a_n - a_m| < \varepsilon$

また、実数列 $a = (a_n)_{n=0}^{\infty}$ について、有界ということ次で定義する：

- a が有界 $\iff \exists C > 0 : \forall n \in \mathbf{N} : |a_n| < C$
- a が上に有界 $\iff \exists C \in \mathbf{R} : \forall n \in \mathbf{N} : a_n < C$
- a が下に有界 $\iff \exists C \in \mathbf{R} : \forall n \in \mathbf{N} : a_n > C$

問 5-1A. 実数列 $a = (a_n)_{n=0}^{\infty}$ について、 $a_n \rightarrow \alpha$ でない (数列 a が α に収束しない) ということ、論理式で記述せよ。

問 5-2B. 実数列 $a = (a_n)_{n=0}^{\infty}$ が或る実数 α に収束するとき、 a が Cauchy 列であることを示せ。

問 5-3B. 実数列 $a = (a_n)_{n=0}^{\infty}, b = (b_n)_{n=0}^{\infty}$ について、 $a_n \rightarrow \alpha, b_n \rightarrow \beta$ ならば、 $a + b := (a_n + b_n)_{n=0}^{\infty}$ で定める数列 $a + b$ について、 $a_n + b_n \rightarrow \alpha + \beta$ であることを示せ。

問 5-4C. 前問と同じ状況で、 $a \cdot b := (a_n b_n)_{n=0}^{\infty}$ で定める数列 $a \cdot b$ について、 $a_n b_n \rightarrow \alpha \beta$ であることを示せ。

問 5-5A. 実数列 $a = (a_n)_{n=0}^{\infty}$ が有界であることと、上に有界かつ下に有界であることが同値であることを示せ。

問 5-6B. 実数列 $a = (a_n)_{n=0}^{\infty}$ について、

- (1) a が収束するならば、有界であることを示せ。
- (2) $a_n \rightarrow \alpha > 0$ ならば、 $\exists c > 0 : \exists N \in \mathbf{N} : \forall n \geq N : a_n > c > 0$ であることを示せ。

問 5-7D. 実数列 $a = (a_n)_{n=0}^{\infty}, b = (b_n)_{n=0}^{\infty}$ について、 $a_n \rightarrow \alpha, b_n \rightarrow \beta$ で $\beta \neq 0$ ならば、或る $N \in \mathbf{N}$ が存在して、 $n \geq N$ なる $n \in \mathbf{N}$ に対して a_n/b_n が定義できて、 $a_n/b_n \rightarrow \alpha/\beta$ となることを示せ。

問 5-8C. 実数列 $a = (a_n)_{n=1}^{\infty}$ に対し、部分和の平均 $t_n := \frac{1}{n} \sum_{k=1}^n a_k$ によって定める数列

$t = (t_n)_{n=1}^{\infty}$ を考える。

- (1) a が有界ならば、 t も有界であることを示せ。
- (2) $a_n \rightarrow \alpha$ ならば、 $t_n \rightarrow \alpha$ であることを示せ。